

# 塾に使えるクーポン、無料勉強会も

# 学ぶ機会狭めたくない



4



●仲の良い板倉凱士君(左)と弟の颯士君。宮城県石巻市新館●中学生に話しかける浅野温基さん。仙台市青葉区の仙台レインポーハウス

阪神大震災20年

を支払う。

「全国から集まった寄付で被災地の教育産業を支援、雇用が確保されることで生活の立て直しにつなげてほしい」と能島は言う。

被災地では新たな学習支援の活動も生まれている。

大橋雄介(34)は大震災をきっかけに、NPO法人アスイクを立ち上げた。

みやぎ生協のフードバンク、社団法人パーソナルサポートセンターと連携し、

仙台を拠点に困窮家庭の子らを支えている。

学習支援を窓口にして、親からの相談にも応じる。

家計の悩みは生協に、仕事の相談はセンターにつながる。地域で子どもを見守る態勢を整えてきた。

大橋は大震災の前年に勤め先を辞め、起業しようとして仙台に移り住んだ。震災直

後、学校に行けない子がいると知り、学習支援の経験はなかったが、避難所で勉強会を始めた。

アスイクの活動は2013年度から仙台市の学習サポート事業に選ばれた。生活保護家庭などの中学生を対象にした無料の教室を、仙台レインポーハウスなど8カ所に設けている。

大学生のボランティアが教室を支えるが、この夏、高校2年の浅野温基(17)が全壊した浅野は、震災直後の勉強会で親身になってくれた大学生の姿を思い出して、支える側に回った。

「きょうは学校でどんなことがあった?」。机を挟んで向かい合う中学生に、優しく語りかける。

そんな浅野を慕って、間遠になっていた中学生が足しげく教室に通ってくるようになった。(敬称略)

中学3年の板倉凱士(15)

と小学5年の颯士(11)の兄弟は、東日本大震災で宮城県石巻市の自宅が津波に襲われ、仕事に出掛けている母を亡くした。

母はあの日、凱士の携帯に「生きててよ」とメールを送ってきた。同僚は屋上に避難して無事だったが、屋上に逃げる呼びかけを断って母は子らのもとに向かった。凱士はそのメールを

今も大切に保存している。

父親の芳徳(45)も被災して仕事がなく、同居する両親の年金に頼る暮らしが続いた。「息子たちの選択肢を狭めたくない」と支援情報を探し、塾に使えるクーポンを申し込んだ。

高校進学を控えた凱士は、塾で英語と国語を学ぶ。サッカーに打ち込む弟も同じ塾に通っている。

クーポンは、兵庫県西宮市にある社団法人チャンス・フォー・チルドレン(CFC)が提供している。

事業の原点にあるのは、CFCの母体であるNPO

法人の理事長能島裕介(38)が関西学院大1年の時に起きた阪神大震災だ。街はきれいになっても、

産業の復興は遅れた。雇用が確保されないと、被災者は生活を立て直せない。その教訓から、子どもの支援に加え、被災地の教育産業も支える仕組みを考えた。

年間30万〜15万円分のクーポンを受け取った子は、CFCと提携する被災地の塾やピアノ教室などを選べる。提携先には、個人や企業からの寄付をもとに料金